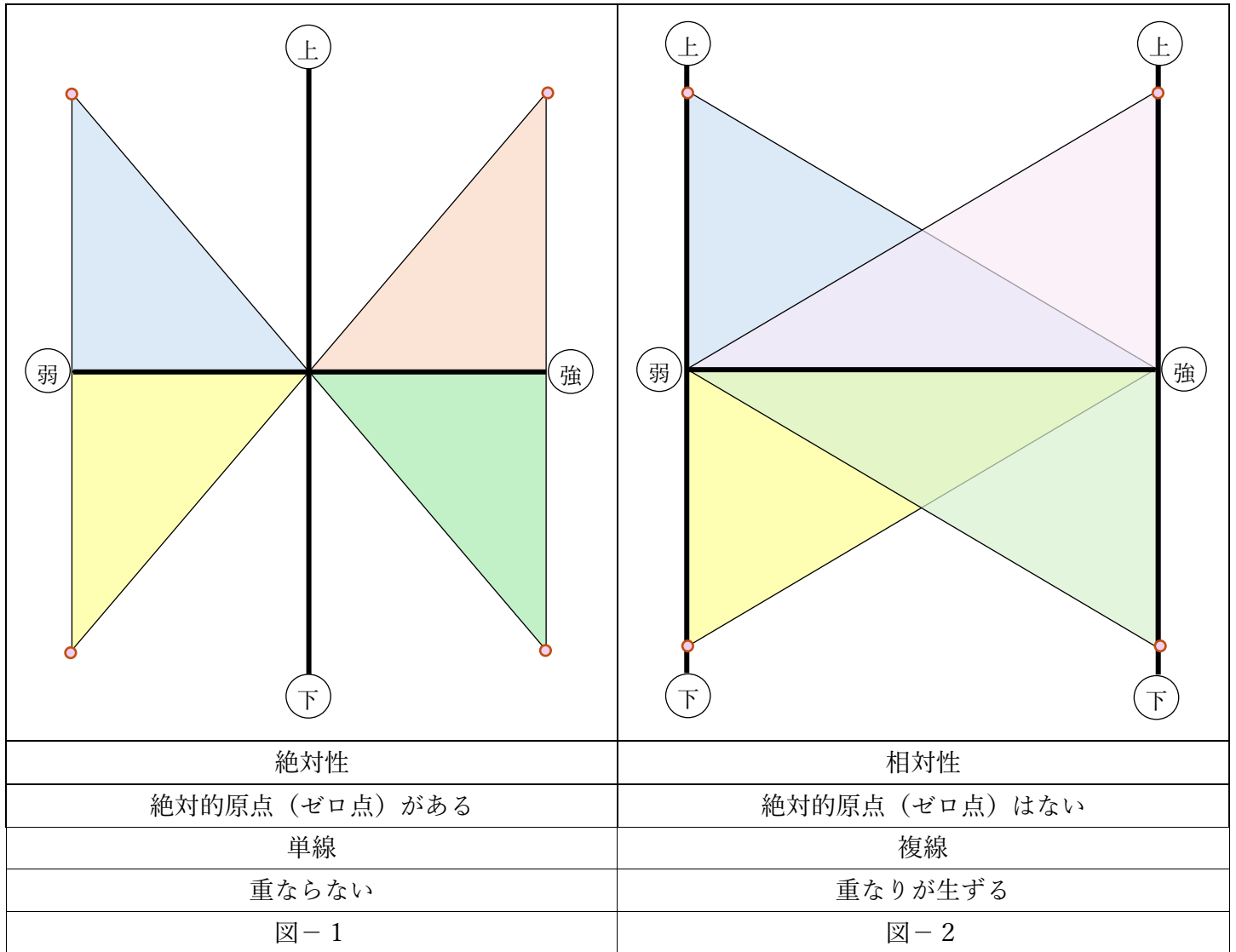


【ZigZag-memo No038】評価の座標

強・弱と上・下の四つの要素を以って、優劣評価の有り様をイメージ図化する。強の上質（上等）、強の下質（下等）、弱の上質、弱の下質の四つの極点ができるが、図－１と図－２の双方に同じ質を以って生ずる。しかし、中身の教訓は異なる。



この世の森羅万象「もの・こと」について理論上の厳格な客観評価する場合は、図－１の観方で適用すべきものとする。しかし、人間関係・対人関係というか、あえて人をあれこれと評価しようとするならば、図－２の観方で適用すべきものとする。しかし、人物を評価しようとしても絶対基準を設定できないので相対評価だけが適切ということである。図－２において、左端の太線は下－弱－上、右側の太線は下－強－上と絶対原点（ゼロ）を通過しない。また、中央横線は弱－強で同じく絶対原点（ゼロ）を通過しない。

基準のない相対評価とは優劣の判定を付けようがない概念となる。対人関係は、華嚴の世界――、人間を含めた現実のこの世のあらゆる「もの・こと」は単独では存在し得ず、お互いが原因となり結果となり、主客の立場が入替わり、連鎖の網で結ばれた存在である、無限の個別集合体、相互関連性・相依相関ネットワーク（縁起）の賜物だ、あるいは簡潔に「もの・こと」は縁起の結実であると説く。――で成立するので当然なのだ。このような一面を持って入れば人と争う原因は生まれて来ないのである。

(end)